



鼎談書評

33

人生の大半を監獄で過ごした壮絶な記録

松原広志訳

監獄と流刑

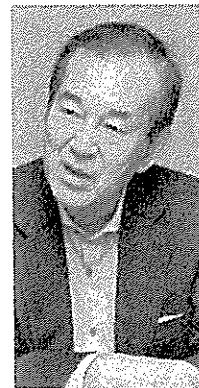
イヴァーノフ・ラズムニク回想記



成文社
5000円+税

山内 帝政時代からスターリン時代まで四十年余りの間に何度も投獄されたロシアの作家、イヴァーノフ・ラズムニクが、経験を克明に記した読み応えのある本です。大学院生時代に彼の『ロシア社会思想史』をゼミのロシア語講読で読んだこと

もあり、懐かしきもあって手に取りました。春にロシアを訪れ、もう一度ロシア文学に触れたいと思ったのもきっかけです。しかも今回のゲストはドストエフスキーの翻訳者の亀山さん。いろいろ伺えるのが楽しみです。



やまうちまさをゆき
山内昌之
(歴史学者・明治大学特任教授)



かたやまもりひで
片山杜秀
(政治学者・慶應義塾大学教授)

亀山 あまりの厚さに読み通せるか最初は不安でもありましたが、読み始めると止まりませんでした。

山内 もともと物理を志していたラズムニクは、途中で文学へと方向転換をします。日本でもそうですが、ロシアではスターリン体制下でも物理学や数学を修める人間は特権的に保護されていました。それなのにラズムニクは文学や哲学に関心をもち、いちばん肅清されやすい立場に身を置いてしまふ。恩師にも「お前はバカだ」と言われる場面が出てきます。

しかも彼は、帝政時代には反体制運動にかかわったとして投獄され、ロシア革命の後、スターリン体制の下でも政治的に好ましくないとして投獄され続けるといふ二重に悲劇的な人生を送る。入党して活動した経歴もないのに不条理極まりない。特にルビャンカにある未決監獄の描写

は迫力があります。約二十平方メートルのスペースに六十人が押し込められる「犬舎」は耐え難い温度と湿度で皮膚病が蔓延し、六十人の呼吸により恒常的に炭酸ガス中毒に苦しめられる。いっぱいになった用便桶は、溢れて石の床へと流れ出す。こと比べれば、他の監獄はまるで天国だとまで書いています。想像するだけでもおぞましい。

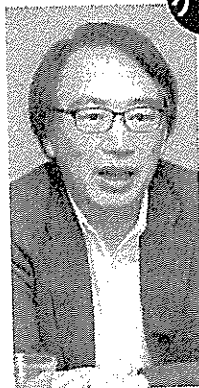
ドストエフスキーは生ぬるい

亀山 ロシアではドストエフスキーの『死の家の記録』など、収容所での生活を描いた作家が多くいますが、なかでもっともすぐれて緻密な記録を書いた作家として、今後長くラズムニクの名は残っていくであろうと感じました。彼の経験に比べれば、ドストエフスキーなんて生ぬるい(笑)。

今月のゲスト

(ロシア文学者・名古屋外国語大学学長)

かめやまいくお
亀山郁夫



私はこういった「収容所文学」が好きなのですが、そこで大切なのは「光度」、つまり悲惨な状況下でいかに光を感じさせるかだと考えています。光度が曖昧だと、文学としての価値が危うくなる。その点で、ルビャンカに送られる前、モスクワのブティルカで囚人たちが「文化啓蒙サークル」を作って、夕食と就寝の間に講義を行なったり、語学を学んだりする情景は素晴らしいと思いました。『シャバ』で得た自分たちの記憶をもう一度甦らせることで命をつ

ないでいく。収容所の中で見られる、生命の輝きですね。ラズムニク自身は、おそらく文学を意識することなく記録に徹していますが、それがかえって迫真性を高め、文学としての価値となっています。

片山 帝政時代、レーニンの時代、スターリンの時代と、入獄を繰り返して、その詳細な記録が積み上げられている点でも、特別な収容所文学ですね。ひとりでこれだけ幅広い時代の監獄を体験するとは凄すぎます。帝政期の学生時代の最初の投獄では、作曲家、リムスキー＝コルサコフの一家から果物籠の差し入れがあったり、合唱したり、楽しげなくらいで、ところがソ連時代に入ると目も当てられなくなる。最後は独ソ戦勃発で混乱する中、ナチス支配地区への逃亡に成功しますが、そのくだりも苦難の連続。日本敗戦後の中国で国共内戦下を飢餓状態に追い込

たちの過酷な経験を、文字にして残し、魅了させたくないような現実にも向かい合わざるを得ません。その切実さは、ヨーロッパ諸国とは比べものにならないでしょう。

明治以降の日本では、ロシア人は粗野で野蛮な連中だろうと、ひじょうに偏った見方をされてきました。

乗松 優

東洋選手権を入り口に戦後史を解きほぐす

ボクシングと大東亜 東洋選手権と戦後アジア外交

片山 幼い頃からボクシングに「東洋〇〇級チャンピオン」が居るのは知っていました。その東洋の意味を知らぬまま、半世紀ほど経ってしまいました(笑)。この本で初めて分かりました。実に奥が深い。

東洋選手権は一九五二年、フィリピンと日本の興行師の合作で始ま

まれながら逃げ惑った日本人たちの記録を彷彿とさせます。よく途中で命を失わなかったなど嘆息が出るのみで。

亀山 一九〇一年から四四年までですから、ソルジェニーツインの『収容所群島』とはひと味違う。

現代への予言の書

片山 多くの収容所文学は限られた経験を膨らませて書かれている気がしますが、ラズムニクは体験が豊富すぎて膨らませる必要がない。そしてその記録がリアルであればあるほど、自身の超現実性が際立つ。何種類も相矛盾する調書を取られて、そのどれが採用されるか分からないとか。パリのモデルのような美人取調官が暴虐の限りを尽くすとか。カフカのようでも、『女囚さそり』のようでもある。しかもこの本の世

しかし本書にあるような不条理さを抱えながら、ロシア人たちは文学や音楽など芸術を生み出し、今日に至るまで不条理さとあわせて歴史を生きてきました。本書でその深さの一端に触れることができると思います。やっぱり、ロシアの底力はすごいですよ。



忘羊社
2200円+税

る。朝鮮戦争にフィリピン軍も参戦して何千人も送り込む。軍人兵士が定期休暇で過ごすのは東京ですよ。占領下の東京にフィリピン人脈ができてくる。そこから日本人とフィリ

界は今や予言的です。昨年、アメリカのグアンタナモ収容所に収監されたモーリタニア人の手記が出版されましたが、二〇〇一年以降、民主主義国家でも、怪しい人間を隔離・監禁したくてたまらなくなっている。トランプは公約にさえ掲げています(笑)。

山内 ロシアは地政学的にヨーロッパとアジアにまたがり、歴史的にも大きな広がりを持っています。十九世紀前半に活躍したロシア人哲学者、ピョートル・チャアダーエフは著書『哲学書簡』で、「ロシアというのは、世界に教訓を与えるために存在している」という有名な言葉を残しています。

亀山 まさに現代への予言(笑)。
山内 フランスやドイツの文学も豊穡ですが、ロシアの経験してきた歴史を考えると、ロシア人にとって文学は欠かせないものだった。自分

ピン人のボクサーを戦わせる東洋選手権が生まれてくるんですね。

そしてこの東洋という言葉が大東亜共栄圏建設に挫折して三等国に転落した日本人の胸に悔恨と郷愁を伴って刺さる。プームを呼ぶ。そこに岸信介の東南アジア外交も絡んでくる。日本に対する戦争被害の恨みはフィリピンが特に深い。その和解の結がピンポン外交ならぬボクシング外交というわけで。著者は、史料を博搜し、生き残りの関係者に丹念に取材して、ボクシングから大きな戦後史を描きます。その道と縁の深い右翼やヤクザについても掘り下げています。安部譲二にも取材している。いい本です。

山内 第一章でまず出てくるのが「帝拳(帝國拳闘協会拳道社)」の田辺宗英。懐かしいね。我々の世代は、ボクシングではなくて拳闘です(笑)。日本一や世界一ならば力量は明らか

鼎談書評

ですが、では、東洋一と言ったとき、どの範囲を東洋というのか。東洋とは何ぞや、という問いが生まれてくる。プロレスでいえば、インド出身のタイガー・ジェット・シンは東洋に入るのか否か(笑)。さらに、日本の戦後史をたどる深みもある。

亀山 私も父親がボクシング好きだったので、よく隣でテレビ中継を見たものです。ピストン堀口や白井義男、カーン博士など、当時聞いた名前に触れ、追体験しているように感じた。加えて、大きな戦後の流れをしつかりと捉えている。「東洋チャンピオン」というキーワードから論じていく着眼点が素晴らしいですよ。本の帯もいいですね。「日本テレビ史上 最高視聴率96%！」と書かれたら、読みたくなるなあ(笑)。

片山 その最高視聴率が日本テレビによる後樂園からの東洋選手権の中継というのですが、これには種も

「ヒリッピン」と言っていて、母に「ヒリッピンは対日感情が悪い国、インドは対日感情のいい国」と大雑把に教わった記憶がありますが(笑)、日本とは賠償問題をめぐって揉めに揉めた。そんな時に親善交流の先陣となったのが拳闘だったとは驚きました。日本からフィリピンを訪れたボクサーたちは、大統領官邸にまで招かれて歓待を受け、試合は大入り満員だったというのは痛快ですね。

片山 アメリカ化の進んだフィリピンは、日本とは戦争中の折り合いが本当に悪かった。そんなフィリピンは拳闘だけでなくジャズでも日本より進んでいた。ボクシングとジャズでは、アメリカ→フィリピン→日本という序列があった。そのへんの機微も上手に解説しています。

亀山 研究者の著作ですが、単なる論文に終わらないおもしろさがある

仕掛けもあって後樂園スタジアムの社長でもあった田辺と、日本テレビの創始者、正力松太郎の結びつきによって、後樂園で行われるスポーツは、野球もボクシングも日本テレビが放映権を独占する契約がなされたというんですね。しかも田辺は戦前には岩田愛之助の主宰した愛国社の社員。つまり右翼です。そのうえ田辺は阪急の小林一三の弟。警察官僚出身で政財界に顔の利く正力とはパイプが幾つもあったんですね。

山内 CIAにも通じていたと言われる正力松太郎は、反共の牙城としてテレビを使おうと考え、ボクシングやプロレス、野球を組み込んでいく。レーダーまで扱おうとするスケール感は途方もないですね(笑)。

スター選手がクーデターに

片山 さらに本書は有名ボクサー

るのは丹念な取材の賜物でしょう。当時のボクサーやトレーナーたちを尋ねて話を聞いているから、迫力がある。みなさん高齢なのでオーラルヒストリーとしても貴重です。懐かしい話ばかりなので著者は同世代かと思っただけ、ずいぶん若い(笑)。

片山 しかも松山出身で九州大学。六本木の雰囲気や銀座の「東京

と右翼運動史をつないでくれます。

元日本ウエルター級王者の「ライオン野口」こと野口進は、金平正紀や輪島功一の師匠ですが、若き日には岩田愛之助に心酔し、愛国社に入社して、一九三三年には若槻礼次郎暗殺未遂事件で捕まります。そのくだりを読んで思い当たったのですが、その少し前に大川周明が岩田と組んでクーデターを考えたとき、その計画が日比谷公園で拳闘の試合をやり、興奮した観客を暴徒化させて周辺の官庁を破壊させるというもので。変な計画だなあと思っていたのですが、大スターのライオン野口に試合をやらせるつもりだったので、よう。拳闘のスター選手が右翼で、彼がクーデターの先頭に立つ。凄い話だなあ。

山内 戦後の日本とフィリピンについても、知られていない話が出てきます。私が小学生のころはまだ

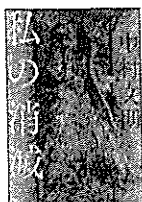
温泉」など、東京の昔をうまく書いたものです。このテーマは広がりがありますよ。タイと日本の関係をキックボクシングから研究するとか、空手とアジア主義のつながりとか。次回作が楽しみになります。

山内 この本を片手に酒を飲んで議論したら、話が止まらなくなりそうですね(笑)。

私の消滅

中村文則

突きつけられる「私とはいったい何者か？」の問い



文藝春秋
1300円+税

亀山 中村文則さんは、芥川賞を獲った『土の中の子供』以来、注目して読んできた作家です。それから彼自身も大きく変化していますが、

鼎談書評

作品のテーマは変わらず、絶対悪と対峙する人間を書き続けています。二〇〇九年の『拘摸』は、今後これ以上のものが書けるのかと思わせるほどの傑作でした。今作はタイトルにまず惹かれて興味津々で読み始めたのですが、これまでの彼の作品同

様、読者を否応なく引き込んで行くパワーは生半可ではない。ぐいぐい読みました。

「このページをめくれば、あなたはこれまでの人生の全てを失うかもしれない」

との思わせぶりな言葉で始まり、ある男の連続した手記という形で物語は展開します。ミステリーでもあるので、内容は「読んでください」と言いたいところですが(笑)、読み終えて、よくもまあこれほど複雑な仕組みを考えたと驚きました。

片山 私もおもしろく読みました。内容は、まさにタイトル通り『私の消滅』。プロットも緻密で、読者が手がかりにする前提をひとつずつ巧妙に崩しながら、それでいてストーリーは破綻することなく最後にびたっと収まります。とにかく「私」が居ると思ったら結局居なかったという展開がたいへんうまく書かれてい

る。このくらいならネタバレにならないでしょうか(笑)。

亀山 私は三回読み、三回目はこの本の魅力を掴んだ気がしました。最初に読んだときは、文体で引っかかってしまったんです。おそらく書き直すことなく思ったままに書かれた文章は、まるで一筆書きのような粗さ、荒々しき。だからこそこの世界観を崩さず、ストーリーにリアリティを与えてくれるんですね。

山内 この粗い文体は、筆者のわざわざ意図した企みなんだ。

亀山 ええ、中村さんは『掏摸』ではかなりかつちりとした文体を使っているので、計算して今回は一筆書きにしたのでしょうか。これまでの作品のなかでも、この作品は一番文体が粗いかもしれませんね。このようにプロットをきっちり練り上げたうえで、浮かんできた一回限りの文章で勝負した作品を、文学と認め

るか否か。その瀬戸際に位置している本と言ってもいいと思います。

片山 でも、この本が美しい日本語で書かれていたら、「よくできたお話」で終わってしまうかもしれない。粗いからこそその臨場感が読者をつかまえて離さない。

亀山 ドストエフスキーも、実はすごく粗い文体なんです。翻訳者が飾って飾って……(笑)。もしドストエフスキーが日本語に訳された自分の作品を読んだら驚くでしょうね。今回の中村さんと近いものがあります。

片山 人に他人の記憶を刷り込むことがストーリー上の大きな仕掛けですが、それはかつてSF作家のフリリップ・K・ディックがよく使った手です。本作に限らず、最近純文学がSF化している傾向がよく指摘されていますが、今の世の中では作家の想像力を上回るような異常な

ないと、一昨年に出た『教団X』のような、善悪が混沌とした作品は書けないでしょう。

山内 物語のなかでも、睡眠や催眠、眠りが重要なものとして描かれています。先日寝る前に読もうとしたら、内容を察したのか、家人に「夢見が悪くなりそうだからやめた方がいい」と止められました(笑)。

亀山 私も寝る前に読んでいたら、初日に悪夢を見たんです。山内 そうでしたか。悪夢だけで済んでよかったです。

亀山 夢にまで入ってくるほど、この小説のパワーは強いのかとびっくりしました。今日は最初にラズームニクの本を読みましたが、本書の、病院という閉鎖空間を舞台に行なわれる洗脳のプロセスは、收容所文学にも似ている気がします。

片山 やはり收容所文学の時代が来ていますね(笑)。

できごとばかり起きるので、かつての純文学のくくりではなかなか現実以太刀打ちできない。そこでSF化しがちなのですが、SFの大仕掛けのつもりで先を読んだつもりでも、すぐ現実には追い抜かれてしまう。作家にはなかなか厳しい時代です。

亀山 設定があまりに大掛かりになると、言葉が追いつかず、映像の方が向いている。その点、中村さんはほどよく現実社会に追いついていると言えるのではないのでしょうか。

宮崎勤を鋭く分析

片山 本作が投げかける「自分とは何者か」という問いは、かつては高尚なものでしたが、いまや一般的になった感があります。自分が考えて話しているつもりの内容は、テレビやネットから刷り込まれた諸々のランダムで刹那的な組み合わせにす

ぎないのではないか。確固たる自分なんて、もう居ないのではないか。作者はその問いに、幼女連続殺人犯の宮崎勤を織り込むことによって、ひとつの解を与えます。

山内 手記3から4、5と、宮崎勤について書かれた部分を興味深く読みました。当時の宮崎の供述に出てきて話題になった「ネズミ人間」が彼を刺激したのではなく、宮崎がネズミ人間を利用して殺害へ踏み切ったとすると心理分析は鋭い。宮崎勤の裁判は日本ではじめて解離性同一性障害、いわゆる多重人格が登場して話題になりましたが、筆者もかなり似た一面を持っているのでしょうか。

亀山 潜在的にはたぶん。おそらくそれが力の根源です。逆にそれが

鼎談書評